自省と二つの戯曲について

鈴木裕美

今回の候補作品はどれもがキラッとした輝きがあり、面白かった。しかし、失礼な言い方になってしまうが率直に言えば、圧倒的な作品、好き嫌いを超えて優れていると感じられる作品は、残念ながらなかった。

議論は混迷したと思う。その中で、私は選ばなくてもいい言葉や言い方を数多くしてしまったと強く反省している。最も強く反省しているのは武田操美さんの『みえない』に関しての発言だ。私は戯曲に一種の違和感を感じていたが、その正体を全くの憶測で理解したように思い込み、そう発言してしまった。

私は『みえない』の主人公の二人の中年女性、七美と一子の一種のユートピアのような異様なまでの仲の良さから紡ぎ出される会話を、とても魅力的だと思った。日常での会話も、夢の世界での会話も、愉快で間が抜けていて、ウイットがあり、イキイキしていて、好みで言えば大好物だったし、作者が絶対の自信を持って描いていると感じた。しかし一方で二人の関係には、幼少期に七美が受けた性的被害が大きく作用している。七美はその記憶を失くしているが、一子は覚えている。その性的被害をめぐる関係性と、二人の愉快な仲の良さの語り口に、私は、違和感、温度差を感じた。一子が何らかの形で七美の仇を討つ物語が描きたかったのかとも思ったが、私には物語の核が掴めなかった。

戯曲を読んでから公演のチラシを見て、作者が主人公を演じていらしたことを知った。そこで私は分かったようなつもりになってしまった。「この戯曲は実際に仲良しの女優さんたちが演じることを前提に書かれており、二人の会話こそが作者としても俳優としても最もやりたかったことなのだ。だからそれに対する情熱と性的被害をめぐる物語の間に温度差があるのだ」と。

受賞式後に、この物語は武田さんの実際の親友をモデルにしているという話を聞いた。武田さんの親友は本当に記憶の一部が失われているのだという。つまり私が「二人の会話に絶対の自信がある」と感じたことはあながち間違いではなかったが、「仲良しの女優さん二人が自分たちがイキイキと演じることを第一義に書かれた戯曲」と考えたことは大間違いだったというわけだ。

この物語に性被害がどうしても必要だったかについては疑問を持っているが、分かったつもりになって発言をしたことを武田さんに深くお詫びしたい。

『さよならの食卓』を読んでまず感じたのは、最後の台詞が、チェーホフの『かもめ』でトレープレフが書きニーナが演じる戯曲のようだ、ということだった。あの「人もライオンも…（略）つまりは一切の生き物、生きとし生けるものは、悲しい循環をおえて、消え失せた」という有名なセリフである。

私は『かもめ』の登場人物たちは全員、孤独で誰かそばにいてくれる人を追い求めているのだが、全くコミュニケーションが不得手で、問題のある発言や行動を繰り返してしまう、いわば「10人の困ったちゃん」だと思っている。それには異論もあるだろうが、私は坂本さんの戯曲をトレープレフが書いたようだと思った。それはトレープレフの書いた戯曲がそうであるように、技術的に優れているとは言えないのかもしれない。しかし、孤独な困ったちゃんが誰かと繋がりたいのに繋がれず、救いを求めて不器用に叫ぶ声は、確かにそこにあると思った。

今回の議論で、「この方に賞をあげたい」という意味の会話があった。私は、選考委員の仕事は優秀な作品を選ぶことのみであると思っている。賞を「あげる」のは私たち選考委員ではなく、大阪ガスさんである。また、「この方が受賞すると、自分はこれでいいんだと思ってしまわないか」という意味の会話もあった。受賞者のその後を考えるのは優しさであるとは思う。しかし、私は受賞者のその後に自分が何らかの責任を持てるとは考えない。また「その方が OK だと思ってしまうかもしれないこと」を優秀作品を選ぶ際に考慮すべきだとも考えない。所詮、全くの憶測でしかないのだから。戯曲の書かれた背景や作者の想いに想像を巡らすのは、非常に大切なことで

あると思う。しかし、それを分かったような気にならず、あくまでも戯曲に向き合わなくてはならないと強く自省している。